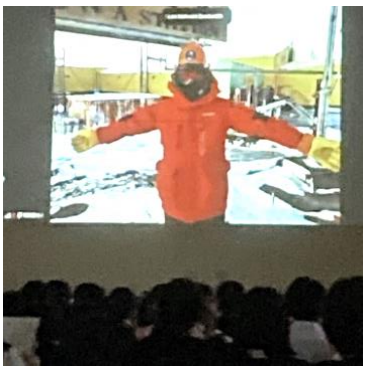
マイナス21℃

ゴールデンウィークに入り、ニュースは観光地の画像や高速道路の渋滞の場面を映し出していました。各地で「夏日を記録」とアナウンサーは繰り返していました。福島県の伊達市では、4月28日の最高気温が32．3℃を記録。「熱いぜ」でおなじみの熊谷の30．8℃を抜いて、日本列島で最も高い気温を記録しました。福島以北の気温が気になり調べてみると、宮城県仙台市は27℃、青森県青森市は24℃いずれも7月中旬から下旬並み、北海道札幌市は15．6℃。北海道は平年並みのようでした。

30日、3年Ｃ組の社会は日本各地の農産物や酪農品について学んでいました。「北海道の生産量について考えよう」の発問に生徒たちは考察しています。平年並みの最高気温であった北海道を扱う授業を担う猪先生は、すでに半袖。暑さが続いています。

額に汗をする気温の中、6時間目は、南極昭和基地と、立川にある国立極地研究所を衛星回線で結んで、全校生徒が参加し「南極教室」を開催しました。昭和基地のスタジオから第65次隊の隊員山本さんが、生徒からの



質問に対し、軽快に回答し、時には動画を使って解説してくれました。昭和基地の屋外にいる隊員と生中継を結び、気温を確認すると、なんとマイナス21℃!!当然ですが、清瀬中より北海道より気温が圧倒的に低い。「洗濯物を外で乾かすと？」の質問には実験動画で回答。水気をしぼり、ハンガーにかけて30秒ほどで凍てつき板と化した Ｔ シャツには、会場がどよめきました。続いて生物の話になりました。マイナス21℃の世界にも活動する生物が存在し、2016年には新種のゴカイ、2021年には新種のセンチュウが発見されたそうです。さらには、3000万年以上かけて積み重ねた硬い氷上をお腹でかわいらしく滑るペンギンの画像をご紹介いただきました。

1957 年に 1 次隊が昭和基地を設立してから現在に至るまでの 60 年以上にわたり、地球環境の観測を続けています。人間による影響が最も少ないところでの観測は地球温暖化や環境汚染の基礎データとして大変重要な役割をするのです。その南極までの航海は、命の危険と背中合わせです。特に南緯 40 度から 60 度にかけての海域は、地球を周回する偏西風や海流（南極環流）の行く手をさえぎる陸地がないため、強い風や高い波が発生する暴風圏となっており、「しらせ」の船体が30°も傾くこともあるといいます。上陸しても風速60mのブリザードに見舞われることも。越冬隊の皆さんは一年間滞在するのですから、感謝の言葉しか見つかりません。

結びに「夢を実現するための3つのこと」伝授していただきました。そして、スタッフの皆さんが登場。マイナス21℃という過酷な環境下でありながら、地球のために昭和基地で勤務する皆さんの厳しく 硬い表情 は笑顔へと変化。清瀬中のみんなへのエールとなりました。